福島区歴史研究会 会報
第十五号

2022.3

目次

田辺聖子「日記」文中の「欠伸男」の顛末
―自伝風小説の陥穽―　田野　登　2

一　解　題
二　「十八歳の日の記録」の「欠伸男」
三　自伝風小説『私の大阪八景』の陥穽
四　「欠伸男」のいない焼け跡
五　田辺聖子にとっての「わが町」
六　結　語

近傍の「往事点描」・・・・・・・・・・・・・・・岡倉光男　14

一　船津橋関連
二　堂島大橋関連
三　玉川交差点周辺状況
四　下福島消防出張所の事
五　その他

［新型コロナ禍の二〇二一年］
二年目のコロナ禍で経験したこと・・・・・・・・末廣　訂　18

一　巣ごもり生活の二年目が始まるとは
二　糠喜びをした「アメリカ合衆国からの小切手」
三　巣ごもり中で「整理」や「まとめ上げた」もの

ノダフジに関わる新刊紹介・・・・・・・・・・・・・藤　三郎　21

一　『フジ―総合ガイド―』藤　三郎著
二　『藤と日本人―藤の文化誌―』有岡利幸著
三　『村野藤吾と俵田明』　堀　雅昭著

尼崎城と城の東側大物周辺の散策・・・・・・・・・澤田耕作　30

堺幕府と野田城―文献にみる野田・福島・中嶋

二〇二一年第一回セミナー報告―・・・・・・・森畑通夫　32

２０２１年の事業　36

２０２１年の活動記録　36

田辺聖子「日記」文中の「欠伸男」の顛末
―自伝風小説の陥穽―

田野　登

一　解題

本稿の標題《田辺聖子「日記」文中の「欠伸男」の顛末―自伝風小説の陥穽(かんせい)》の「日記」とは、『文藝春秋』二〇二一年七月号に掲載された田辺美奈「田辺聖子「十八歳の日の記録」」（以下「日記」と表記）の「十八歳の日の記録」である。「日記」を読み進むと、この雑誌掲載では昭和二〇（一九四五）年四月一日から始まり昭和二一（一九四六）年一二月三一日で終わっている。この雑誌掲載の「日記」を本稿テキストとする。「日記」には、「欠伸男」なる言葉が用いられている。『私の大阪八景』（以下『八景』と表記）「その四　われら御楯」（角川文庫、改版再版発行、二〇一八年：初出「文學界」一九六五年九月一日発行）記事にも「欠伸」「アクビ」が見える。この両者を校合しながら論究する。

論究する過程で単行本『田辺聖子　十八歳の日の記録』（以下『単行本』と表記　二〇二一年一二月一〇日発行、文藝春秋）が出版され、ノンフィクション作家・梯久美子「解説」において『私の大阪八景』等を「自伝的小説」と位置づけている。一連のこのような評価を自伝を装った「自伝風小説」の陥穽にはまったものと考えた。

二　「十八歳の日の記録」の「欠伸男」

「日記」（二七七頁下）の一九四五年六月二日付記事に、標題に掲げた「欠伸男」が記述されている。「日記」の「欠伸男」に至る箇所までの記事を駆け足「区間急行」でたどる。記事の前日六月一日には大阪大空襲で福島の実家の田辺写真館が罹災している。

◆関急は鶴橋より向うは不通である。窓から、炎だとか煙だとかが遠望された。私は満員の電車の中で、それでも希望を失わないでいた。さて鶴橋からの城東線も不通である。大阪まで歩かねばならぬ。勇を鼓して三人は歩きはじめた。爆弾による土煙とか、焼夷弾の煤などがまじった雨が降り、白いワイシャツなど、ほの黒いしみになってのこる。至るところ、交通遮絶である。まず上六まで出た。（「日記」二七五頁下～二七六頁上）

「関急」は関西急行、現在の近畿日本鉄道である。田辺聖子が通った学校は樟蔭女子専門学校（現・大阪樟蔭女子大学）である。最寄り駅は小阪駅（現・近鉄奈良線）である。鶴橋から上六（上本町六丁目）まで出て、「日記」には「湊町へ通ずる道を歩いた」とあり、西に向かったようである。「日記」の、この先に見える地名は「梅田新道」で、

ずいぶん飛ぶ。「湊町」の手前の難波あたりで右折、御堂筋を北行したのだろう。

◆靴は水と泥でびしょびしょだ。私は機械的に歩いて、やっとの思いで梅田新道に出た。（「日記」二七六頁中）

実家は、福島西通と堂島大橋の中間あたりなので、梅田新道の南西である。「日記」には桜橋、出入橋、浄正橋といった地名が見える。実家の南東の浄正橋も焼けずにいたので、「ああこれでいよいよ安全だ」と思い、足を休めていた矢先、その先に人だかりがしているとある。「日記」を引用する。

◆私は思いきって歩き出した。そして通りを曲ったとたん、はっとした。白煙がいぶっている。やられた、と思い、出来るだけ急いで天神様の方へ出た。角の三枝はやられているらしいが、この通りは大丈夫らしい。私はどこをどう歩いたか、どんな気持がしたか、てんで、おぼえがない。けれども消防車の長いホースや、人声やただならぬ人声や、煙、それから、途中のやられている家々を見て、助かった、と思った予想が全然裏切られたと一瞬に感じた。（「日記」二七七頁中）

「白煙がいぶっている。やられた」とある。「日記」を書いているのは、一日後の六月二日である。「てんで、おぼえがない」とあるのは、辺りが騒然とし、非日常の場所と化していたからだろう。あるいは、動顛して初めから意識が飛んでいたからだろう。目に止まって書き留められたのは「消防車の長いホース」「途中のやられている家々」で、耳に止まって書き留められたのは「人声やただならぬ人声」である。「日記」の引用を続ける。

◆今はもう、私は意識なく、家の方角へひょこひょこ、たましいが歩くみたいに歩いていると、焼けなかった、無事な家の前で、そこの主人らしい男が無遠慮に、消防の活躍を見ながら、欠伸しているのをみつけた。（「日記」二七七頁中～下）

「日記」のこの段での「欠伸」の初出箇所である。場所は「焼けなかった、無事な家の前」である。欠伸をしている人物は、この箇所では「主人らしい男」である。誰それかは、「日記」筆者・田辺聖子は、この時点では知らない。だから、どなたさまかは、特定できない奇っ怪な(ケッタイな)人物なので、「男」なのである。「やられている家々」を余所に「日記」筆者の目にとまったのは、「欠伸している」行為だけである。「欠伸男」なる言葉は、ここには、まだ見えない。「日記」の引用を続け、罹災当座の田辺聖子の心情を追体験してみる。

焼けなかった家の「主人らしい男」の仕草の記述に注目する。「無遠慮に、消防の活躍を見ながら、欠伸している」のだった。「日記」筆者の目には、如何にも傍観者的態度に映ったと私は解釈する。「日記」の引用を続ける。

◆いやな人だと思って通り過ぎようとすると、後から「あ、田辺さん、田辺さん」と呼ぶ。我に返ってふりむくと件の欠伸男だ。（「日記」二七七頁下）

前文の「主人らしい男」を「いやな人」と無視していたものの、呼びかけられて、振り向くと「件の欠伸男だ」と記述している。先の欠伸をしている男を、「日記」筆者は、この段では「欠伸男」と取りあえず名付けている。この段階では、誰それさんとは、まだ気づいていない訳で、このドサクサの場面での仕草からの名付けである。このあたり、誰にも見せないはずの「日記」なのに、読者を意識した書きっぷりである。「日記」の引用を続ける（註7）。

◆「えらいことでしたなあ、お宅、焼けましたなあ」私はこの言葉が強すぎて、すぐ受取れず、どすんと胸が鳴った。次の瞬間、来るべきものが来た、というあきらめのまじった思いが湧然とわく。私の額はすうっと冷くなった。「はあ、やけましたか」という私の声は、我ながら憮然としていた。（「日記」二七七頁下）

「・・・お宅、焼けましたなあ」への「はあ、やけましたか」の受け答えの「私の声」を、「憮然としていた」と記述している。その直後の「欠伸男」の言葉は、次のとおりである）。

◆「ええ焼けました。あの辺、すっかりきれいになあ、えらいことでしたなあ」と彼はくりかえした。（「日記」二七七頁下～二七八頁上）

「すっかりきれい」の「きれい」は、「きれい、さっぱり」の意味だろうが、「えらいことでしたなあ」を繰り返し、念を押されては、「日記」筆者には、随分と堪えたことだろう。引用を続ける。

◆私はこのとき始めて標札（《ママ》）を仰いで彼が父の知人であり妹の友人の父親である金広氏であることを覚った。（「日記」二七八頁上）

この段での名前を知ったことによる関係性の変化が、これに続く両者のやりとりに、如何に、反映しているか注意深く、追うことにする。

◆「ええ有難うございます。けれど、やはり、一度行ってみますわ」「そうだっか、行っても何もあらしまへんけどな、ほんだら傘、かしたげましょ」と彼は家人を呼んで、小ちゃな、油紙の傘を開いて借（《ママ》）してくれた。私は礼をのべてそこをはなれた。（「日記」二七八頁上）

この段では「彼」と記述している。呼称が変わるのは、祖母に家が焼けたと告げられた際である。「日記」筆者の言葉は、次のように記述されている。

◆「そうやてなあ、金広のおじさんに傘借ってそこで聞いたけど。わたし、省線不通で鶴橋から歩いて帰ってん」（「日記」二七八頁中）

家族との会話では、標札を見るまで知らなかった人物を「金広のおじさん」と親しげに称している。このように「日記」の空襲罹災時の記事を追ってみると、「欠伸男」は、一度きりの言葉なのである。問題は、アクビという仕草にあるのである。

「日記」の「欠伸男」に対応する記事は、『八景』に「無遠慮にアクビをしていた(男)」と見える。以下、この「男」をめぐっての小説『八景』の虚構性を論究することになる。

三　自伝風小説『私の大阪八景』の陥穽

「日記」単行本の梯久美子「解説」に、今回の日記の発見により判明したことを次のように記述している。

◆田辺は自伝的小説やエッセイで何度かこの日のことを書いている。それらは空襲翌日の六月二日に記した内容がもとになっていることが、今回、この日記が発見されたことによって判明した。六月一日の大阪大空襲で経験したこと、見たものが描かれている主な作品には、連作短編集『私の大阪八景』に収録された「われら御楯」『欲しがりません勝つまでは』『田辺写真館が見た“昭和”』『おかあさん疲れたよ』『楽天少女通ります　私の履歴書』がある。（『単行本』二五六頁）

この梯「解説」は、今回発見の「日記」の記事が、後年の田辺の作品の一部の素材になっていることを明らかにしている。ところが「欠伸男」と関連する記事は『八景』以外に記述がないとの指摘が福島区歴史研究会の森畑通夫会員からあった。その経緯は、次のとおりである。

福島区歴史研究会のライン「聖子研究」（管理者は多田一夫同会会員）の上で情報交換する中で私は、「無遠慮にアクビをしていた(男)」、作中では愛称「コントクさん」について、『八景』空襲罹災以降の彼を記述する記事を網羅した資料を情報発信した。すると、それに反応された森畑会員から一〇月二一日の福島区歴史研究会月例打ち合わせ会の後に「『八景』以外の作品には、「欠伸男」の記事はない」とする作品コピーに書き込まれたデータを提供された。それは、単行本が出版された一二月以前のことである。森畑会員から提供されたデータを後日、自分で確かめ再編成してみた。そのような経緯のもとに以下の論を展開する。

なにゆえ、田辺聖子は「日記」に記述した「欠伸男」を『八景』「われら御楯」にだけ登場させ、以後の六月一日の大阪大空襲に取材した作品には、なぜ取り上げなくなったのだろうか？「欠伸男」の顛末を聖子研究の一端として、とりわけ、近所の住民との関係性の変化を視野に入れて論究する。

梯「解説」には、「われら御楯」は、学校から自宅まで帰る途上で見た光景、家が焼けていたこと、父母との再会など、日記に沿った記述になっていると述べた上で、日記の表現もほぼ同じ部分を挙げている。梅田新道における光景三箇所である。（『単行本』二五七頁）

①第百生命が全滅した時の黒煙がふき出す描写

②焼け跡の電柱が燃える光景

③大きい火花が人魂のように飛んでいくさま

これらは、『私の大阪八景』以後の作品にも記述される光景であるが、本稿《二　「十八歳の日の記録」の「欠伸男」》章末で示唆した「アクビをしていた男」は、なぜか「解説」の「日記に沿った記述」としては挙げられていない。問題の「日記」の「欠伸男」が登場する場面に対応する箇所を『八景』「われら御楯」の記述から抽出する。

◆横町へまがると白煙がくすぶっている。やられた、と思った。消防車の長いホースや、人声や煙の中をくぐって、顔色もなく歩いていくと、焼け残った側の家の前で、その家の者らしい男が消防隊の活躍をみながら無遠慮にアクビをしていた。いやな奴だと思って通りすぎよ

うとすると、彼は、「あっ、武田さん」と呼びとめた。「えらいことやったね。君とこ。焼けてしまったよ」コントクさんだった。（『八景』一九〇～一九一頁）

「解説」の「日記に沿った記述」から外された『私の大阪八景』「欠伸男」の続きを引用する。その理由は明らかとなる。「日記」での「件の欠伸男」の正体を知るのは次の場面である。

◆彼はこのとき始めて標札《ママ》を仰いで彼が父の知人であり妹の友人の父親である金広氏であることを覚った。（「日記」二七八頁上）

「日記」での「欠伸男」こと「金広氏」は、『八景』では「コントクさん」であって、作中の「コントクさん」は、「金広氏」が大化けした人物だった。『八景』に戻って、引用文の続きを載せる。

◆コントクさんは皮肉な口調もからかうような目の色もなかった。心から気の毒そうにいった。トキコにはこの言葉が強すぎて、どすんと胸がなったけれども、彼の言葉のいたわりだけわかった。（『八景』一九一頁）

「日記」には「皮肉な口調もからかうような目の色もなかった。心から気の毒そうに」は記述されていなかった。このようにディテールを詮索すれば、殊更、近所の人を登場人物として表現するに当たっては、作者・田辺聖子によるかつてのご近所さんへの気遣い、配慮があったのではないかと推測する。『八景』の引用を続ける。

◆あきらめのまじったおどろきで、「そう・・・焼けたの？」とかすれた声でいった。「あのへん、全部やで、えらいことやったねえ」と彼はくり返した。雨が降っていたもので、「まあちょっとここへ坐ってたらどう。濡れるから家で休んでいったらどう？」「いいわ」「お父さんか誰か、呼んでくるから」（『八景』一九一頁）

コントクさんと「日記」の金広氏の言葉遣いを比較しよう。次に示すのは「日記」の金広氏の言葉である。

◆「まあ、ちょっとここへ腰かけなはれ、お父さん、よんで来まっさ、濡れるさかい、家で休んでなはれ、お父さん、呼んで来たげますわ」（日記二七八頁上）

「日記」の金広氏は大阪弁丸だしである。金広氏は年輩の大阪住民である。「日記」が公開された今日、小説『八景』は「日記」を素材としつつ、別の人物に仕立て上げる意図があったことが分かった。『八景』の引用文を続ける。

◆「有難う。でも・・・やっぱりいってみます」「そうか、行っても何もあれへんけどな」コントクさんはそういった。焼けてしまったら何もないのは当たり前なのに、何もないからといっていかないわけにはいかない。やっぱりへんなことをいう人だ。「傘を貸してあげるよ」コントクさんは番傘をひらいて貸してくれた。（『八景』一九一～一九二頁）

「日記」でも「行っても何もあらしまへんけどな」とあるので、発

言内容に相違はないが、作中のトキコの独白の最後に「やっぱりへんなことをいう人だ」と呟かせている。〈聖子／金広氏〉関係と〈トキコ／コントクさん〉関係が明らかに異なることが読み取られる。作中に「やっぱり」とある。トキコに「へんなことをいう人」と呟かれるコントクさんは、小説読者には、既知の人物で、前段に登場していた、あの人物だと知られている。引用を続ける。

◆さしかけながら、「しっかりしい。八紘一宇の先生」しかし、ひやかしているのではなかった。（『八景』一九二頁）

「八紘一宇の先生」呼ばわりされるトキコがいて、向きにならないトキコもいる。それもそのはずで、『八景』の空襲罹災時記事を二五頁ほど遡ると次の記事がある。

◆兄のないトキコは男子学生に知り合いもない。貝原さんの〈海軍さん〉みたいに、ひと目みただけでドキドキするような存在は、トキコには永遠に現れそうにない。どうやって、知り合いをつくれるものか、だいたい、男子学生とは口を利くことも許されぬきびしさだから、出来る筈もない。―いや、ただ一人、ある。コントクだ。（『八景』一六六頁）

トキコにとって、たった一人の知り合いの男子学生がコントクさんだったのである。作中人物コントクさんの設定は、阪急電車の支線に乗り合わせた場面での次の表現から読み取られる。次の引用箇所は、前掲の「たった一人の知り合いの男子学生」とした箇所の四行後の記事である。

◆彼は新聞に近眼を押しつけるようにして、「大豆の食べ方決定版」というところをよんでいる。彼もトキコと同じ工場の学徒工員で、私立大学の予科生である。（『八景』一六六頁）

「脚にはだらしなくゲートルを巻いている」とも表現し、随所に、かなりドジで野暮ったい学生に仕立て上げている。話題は、すかさずコントクさんたる、奇妙なあだ名の所以に及ぶ。件のコントクさん。電車のドアが閉まる前に飛びこんできたはずみに、肩に斜めに掛かった荷物が邪魔して、なかなか閉まらない・・・・車掌だか運転手だかに怒鳴り散らされるは、乗客からは罵られるは・・・・トキコからは「荷物は、乗る前に体の前へ廻しとくものです」と注意された時、咄嗟に発した言葉は「どうもご懇篤なご教訓にあずかりまして」だった（『八景』一六七頁）。「懇篤（こんとく）」は、「親切で手厚いこと」であるが、作者は例の悪戯心を発揮して、彼の度を越した言葉遣いを揶揄している。

作中のトキコとコントクさんは、「家が近く」と設定されている。「日記」を目にした今、これは、後段の空襲罹災時のご近所さんと符合するためなのであるが、小説での二人は、土日の休暇で帰宅する時、連れ立って電車を乗り継いだりする関係に設定している。そんな折、コントクさんは相変わらず「大豆の食べ方」にご執心で「代用食研究」のようである。一方のトキコといえば、「文学少女」である。ここで、作者は「小さなバトル」を設定する。仕掛けたのはトキコである。代用食のことばかりにとらわれて空腹を訴えたコントクさんに対してトキコが先制する。

◆「ちょっと、も少し知性と教養のあるもんよんだらどやのん」（『八景』一六九頁）

返事に窮するコントクさんに対して、追い打ちを掛ける。

◆「もっと学生らしいものを、よ」「ふうん。そうか、ムサシなんかかい」コントクさんはトキコが手にしていた吉川英治の〈宮本武蔵〉に目をつけていった。（『八景』一六九頁）

この「小さなバトル」の決着や如何？引用箇所の続きは、トキコの反撃である。

◆「そうですよ、八紘一宇の大文学や。これは」コントクさんは小説本にはあまり興味ない容子で、大きい欠伸をした。（『八景』一六九頁）

トキコが吉川英治〈宮本武蔵〉を賞して言った「八紘一宇の大文学」の「八紘一宇」の言葉は、やがて、空襲で家を焼かれて雨降る中で番傘をさしかけながらのコントクさんの言葉「しっかりしい。八紘一宇の先生」が、泣きっ面に蜂のトキコにブーメランとして跳ね返って来ることになる。リベンジされる羽目になる。

「日記」と絡めて大事なのは、「八紘一宇の先生」もさることながら、コントクさんの「大きな欠伸」である。コントクさんの欠伸は、実は罹災時が最初ではなかったのである。アクビという日常の仕草が小説のプロットとして、重要なのである。「日記」の「欠伸男」のアクビを作者・田辺聖子は、換骨奪胎して小説のプロットに組み込んだと考える。勤労動員に通勤する電車内でのアクビは、「あまり興味ない容子」として表現されている。罹災時の場面での欠伸は、「無遠慮にアクビをしていた」とあった。この小さなバトルにおける欠伸は、小説の展開とは逆に後付けである。プロットとして、罹災時の欠伸を引き出すための伏線として、コントクさんの欠伸をまるで彼の癖のように仕立てたと考える。「日記」では「無遠慮に、消防の活躍を見ながら、欠伸している」のを見て「いやな人だ」と思ったのだった。その思いを小説では、ご近所さんとの関係性から、茶化して表現したと推察する。今、「日記」と照らし合わせると、態とはぐらかしたのかとも思えてくる。

前に実家が焼失したことをコントクさんから告げられた場面でのトキコのコントクさんへの心意を詮索した。アクビをしていた「コントクさん」の言葉を「皮肉な口調もからかうような目の色もなかった。心から気の毒そうにいった」と受け止め「いたわりだけわかった」と記述しているのだった。雨の中、自宅の焼け跡に急ぐトキコに傘をさしかける場面でも、コントクさんの言葉を弁護している。

◆さしかけながら、「しっかりしい。八紘一宇の先生」しかし、ひやかしているのではなかった。（『八景』一九二頁）

前に「小さなバトル」として取り上げた箇所であるが、トキコは「冷やかしでない」と好意的に受け止めている。このような記述には、作家・田辺聖子とかつてのご近所さんとの関係性が反映しているのである。小説発表時一九六五年にあっては、火災から免れたご近所さんが「無遠慮にアクビをしていた」とする箇所を、丁寧にも「日記」記事に筆を加えていたのである。作者は、ご近所の「コントクさん」に仮

託して、「日記」の「欠伸男」の当事者である自分自身への配慮のなさを躍起になって帳消しにしようとしている。『八景』では、当事者に向けた配慮を「トキコ」が汲み取ろうとする心意として、作者・聖子は表現しているのである。このやりとりは「日記」には見られない記述である。これは、今回、公開された「日記」の記事との照合によって明らかとなった。

罹災時以降のコントクさんは、欠伸をすることもなく「日記」の欠伸男とは、似ても似つかぬ人物として創作される。身体的特徴の野暮ったさの執拗なまでの記述は割愛するが、コントクさんは、『八景』の「その四　われら御楯」に続く「その五　文明開化」においてもトキコの戦後と寄り添いながらも結ばれる異性とはならず、この国が「民主主義」国家に生まれ変わろうとする時代に共に青春を過ごした「若い男」として表現される。

「その五　文明開化」から、コントクさんとトキコの関係性を表現する場面を抜き出す。

◆コントクさんは「学校を卒業したらどないするねん」といってトキコを見た。「働くわ、でも先生にはなれへん。わたしようへまするさかい、きっと先生はつとまれへん思うわ」「お父さんが亡くなって、たいへんやったね」コントクさんはいつも捉まえどこのないような顔をしているが、若い男にしてはやさしい所もある。終戦の年にチチが胃病で亡くなった。それからは売り食いしたりハハが働いたりしている。（『八景』二三二頁）

コントクさんはトキコ一家のうつりかわりをいつも見守っている恰好になっていた。終戦の年の年の瀬、聖子の父は亡くなり、母は売り食いをしながら生計を支る。たしかに「日記」にも記される「事実」である。前に単行本の「日記」の梯久美子「解説」の次の箇所を挙げた。

◆田辺は自伝的小説やエッセイで何度かこの日のことを書いている。それらは空襲翌日の六月二日に記した内容がもとになっていることが、今回、この日記が発見されたことによって判明した。（『単行本』二五六頁）

「解説」は、この記事に続けて主な作品として連作短編集『八景』に収録された「われら御楯」を筆頭に五作を挙げている。『八景』収録「われら御楯」は、はたして「自伝的小説」なのだろうか？「解説」は、「日記」と「われら御楯」の表現も、ほぼ同じ部分三箇所を挙げているが、「欠伸男」の一致の箇所は、「解説」の「日記に沿った記述」としては挙げられてなかった。それもそのはずで、『八景』には、前段があった。コントクさんの「欠伸」の素材は、「日記」筆者が目撃した「欠伸」の記憶が忘れられない故に殊更、取り上げられた仕草なのである。今まで見てきたように「日記」を自伝の素材とするならば、「コントクさん」に置き換えた一連の記述は、虚構である。田辺自身、二〇〇四年の全集に次のとおりの記事を残している。（註1）

◆戦後日本の空には、闇市の喧噪や、進駐米軍の投げるチューインガムやチョコレートにむらがる女・子どもらの歓声や、―その、もっと上空に、声ない死者らのむせび泣きがあるのだ。その歔欷（すすりなき）を、その時

期に生き合わせ、めぐり合った世代の人間が、書きとどめなければいけない。それには明るくやや軽佻な口吻のほうがかえって似つかわしい…そんな気持ちで、私は『八景』を書くのに、あえて“軽いタッチ”を採用したのだと思う。

わざと「明るくやや軽佻な口吻」にしたと記述している。同じ頁に“文学学校”という“民衆芸術運動の一環”である機関へ通った」ともある（註2）。『私の大阪八景』は、昭和三〇年代の民主主義の昂揚期に書き上げられた文学であって、たしかに聖子自身は「私の書く作品すべて、自叙伝になっていると思う」と述べているが（註3）、この言葉は大風呂敷として受け止めるべきで、今回、発見された「日記」の記事と照らすと如何なものか？『私の大阪八景』は、空襲罹災時のリアルな「日記」記事を随所に散りばめることによって、総てがあった儘かと思わせる「仕掛け」を擁した、「自伝」を装った作品である。「自伝風」の小説、虚構を交えて戦中・戦後の世相を軽妙な口吻で綴った文学とみるのが適当と考える。「日記」にある「事実」に惑わされ、虚構を見逃しては、自伝風小説の陥穽に引っかかってしまいかねない。

四　「欠伸男」のいない焼け跡

「欠伸男」の記述のない空襲罹災時の田辺写真館については、《3自伝風小説『私の大阪八景』の陥穽》に示したとおり、森畑通夫会員の指摘があってのことである。収集した資料は、『欲しがりません勝つまでは』（一九七七年、ポプラ社）、『楽天少女通ります』（初出一九九七年五月一六日「日本経済新聞」「私の履歴書」）、『田辺写真館が見た“昭和”』（二〇〇五年、文藝春秋）の三点である。

一九七七年刊『欲しがりません勝つまでは』の記事は以下のとおりである（註4）。

◆私は疲れ切ったので、家の方角へひょこひょこと、亡霊が歩くような感じで歩いていく。角をまがると、いちめんの白い煙である。五百メートルへだてた私の家のあたりは、白い煙がたちこめ、きれいに何もなかった。まだぶすぶすとくすぶっていて、消防車の長いホースや、かんだかい女の声、男たちが叫びかわす殺気立ったかけ声の中で、私は、ぼんやりしていた。「姉ちゃんが帰ってきた。姉ちゃんが帰ってきた」とマチコが叫んだ。

近所の人たちの描写は、「かんだかい女の声、男たちが叫びかわす殺気立ったかけ声」である。「日記」では、「そこ（註・無事な家）の主人らしい男が無遠慮に、消防の活躍を見ながら、欠伸している」とあって、『八景』では、「焼け残った側の家の前で、その家の者らしい男が消防隊の活躍をみながら無遠慮にアクビをしていた」とあった。

ところが『欲しがりません勝つまでは』では、罹災直後の阿鼻叫喚の世界を表現している。傍観者的な「無遠慮」な仕草なんぞ表現されていない。

一九九七年「私の履歴書」の記事は以下のとおりである（註5）。

◆誰一人、目をあてるものもなく、罹災者たちは無表情にミナミへ向いて歩く。消防車が狂ったように鐘を鳴らして走っていた。消防車、という平和な市民社会のシンボルが、いまほど見当はずれな存在に思

えたことがなかった。・・・たしかに十数発の焼夷弾がいっせいにウチに落ちた、と父はいう。

写真館焼失は、父の言葉「たしかに十数発の焼夷弾がいっせいにウチに落ちた」で済ませている。この父の言葉は「・・・・」の後、一行空白があって記載されている。「・・・・」は、何を意味するのだろうか？文脈からすると、梅田新道あたりと写真館の間であるので、福島界隈の様相と推察される。罹災して五三年を経て町内の惨劇には触れなかった。

二〇〇五年刊『田辺写真館が見た“昭和”』の記事は以下のとおりである（註６）。

◆・・・・梅田新道でＯさんと別れた。私は更に西へいく。やっと福島へ。・・・・家は瓦礫の山と化し、白煙をあげてまだ、くすぶっていた。〈姉チャンが帰ってきた！〉という甲高い妹の叫び声。

「やっと福島へ。・・・・」の後、改行されて、家のありさまが描写されている。「福島へ」とあるので、ここでも、家周辺の福島界隈の描写は表現されずに「・・・・」で済ませている。

『欲しがりません勝つまでは』が刊行された一九七七年以降の田辺の自伝風小説には、罹災時のご近所さんのアクビはもとより、ゲップをする人などなど、当時の人々に関する記事は、何故か噯（おくび）も出さない。次章《五　田辺聖子にとっての「わが町　福島」》では、一九七七年刊『欲しがりません勝つまでは』以降の作家・田辺聖子とご近所さんとの関係性の変化について考えてみる。

五　田辺聖子にとっての「わが町」

『私の大阪八景』を刊行して一二年後の一九七七年刊『欲しがりません勝つまでは』では、「火事場にあって巫山戯（ふざけ）た」とご近所さんなる「世間」からの非難される記述を避けたのだろう。急場の喚声に置き換えて記述している。さらに、一九九七年「私の履歴書」では「・・・・」として福島の罹災時の場面を割愛するに至る。この二〇年の隔たりの間に、聖子における心境の変化を窺わせる記事をあさってみた。

それは『田辺聖子全集』第二三巻、二〇〇六年一月、集英社のエッセイに見つかった。初出は『田辺聖子全集』第二三巻掲載の二五年前の「サンケイ新聞夕刊」一九八一年三月二六日記事である（註７）。

◆福島西通りから堂島大橋にいたる通りの、東側に私の家があって写真館をしていたが、上福島いったいは、昭和二〇年の三月と六月の空襲で、一部を残して、すっかり焼けてしまった。

空襲罹災時の記述や如何？一九八一年新聞記事の続きは、以下のとおりである（註８）。

◆現在は、やたら広い道路が、しらじらと南北に走り、自動車屋とか部分品専門店のならぶ面白みのない町になってしまったが、昔は電車がまん中を走り、(慶祝の日は花電車も通った)両側に、いろんな商店がぎっしり並んで、楽しかった。

罹災時の記述は見えない。一九八一年当時、「現在」を「面白みのない町」と記述し、話題を花電車の通った幼少期の世界に転じている。当時の「現在」の彼女からすれば、何の感興も愛着も感じない光景を

見て、今更、あの忌まわしい出来事を綴ることを忍びなく思ったと推測する。

その理由は、このように幼少期を回顧する傾向は、一九九三年発行の『写真で見る福島の今昔』表紙カバーに寄せられた「戦火に消えた「わが町」」にも見られるからである。冒頭は次のとおりである（註9）。

◆大阪の福島区は私のふるさとである。私は昭和三年生れで、昭和二〇年の空襲に罹災するまで、ずっと住んでいたから、まる一七年を暮らしたことになる。

以下、読み進むと電車道の雑貨屋、酒屋、クリーニング屋、お菓子屋、お医者さん。裏通りの八百屋さん、髪結いさんと書き連ね「のんびりした時代だった」と括って、以下のとおりの文章で結んでいる（註10）。

◆昭和二〇年三月と六月の空襲で、なつかしい「わが町」は消えた。けれども私はその後、幾度もエッセーや小説に「わが町」のことを書き続け、それは私の心の中にいまも著くとどめられている。

田辺聖子は、晩年「福島」の空襲罹災時を書き記さなくなった。『私の大阪八景』に茶化して登場する「コントクさん」に、今回、公開された「日記」の「欠伸男」の残影を見ることができた。しかし、その『私の大阪八景』における「アクビ」すら、その惨状を目の辺りにしての「脱力感」を戯画化して表現したにすぎない。

六　結　語

私が「聖子研究」に加わった当初、田辺聖子の生まれ育った福島区福島の住民の中には、聖子を快く思わない人がいると聞き、小説『私の大阪八景』の町内の人々の記述を再読せねばと思った。直接のきっかけは、『文藝春秋』二〇二一年七月号所載の「田辺聖子「十八歳の日の記録」」を読んだことである。町内の人々の記述に焦点を合わせて、田辺聖子と町内の人々との関係性を探るために読んでみた。たしかに小説『八景』と「日記」との記述が重なるところが散見される。しかし、「日記」の「欠伸男」と『八景』の惨状を目の当たりにしてアクビをする「コントクさん」とは、全く別の人物であることに気づいた。証拠もなく感じていた『八景』の虚構性を「日記」を読んで知った。

折も折、単行本『田辺聖子　十八歳の日の記録』が出版され、その「解説」に田辺の一連の空襲に取材した作品をノンフィクション作家が「自伝的小説」と評し「あの日見た事実を変えている部分はなく、作家の目で事実を加工することを行っていない」とあるのを知って副題「自伝風小説の陥穽」を思い立った。「事実を加工することを行っていない」と見るのは、自伝風小説の罠にまんまと掛かっているのである。

この小説を丸ごと「事実」と読む読者が存在するゆえに町内の人々との蟠（わだかま）りが生じているのではないかとも思う。『私の大阪八景』の文学的価値は、戦中・戦後にかけての世相を軽妙に表現しているところにある。それは、その時代に生きた市井の人々を戯画的手法で以て描写し、人物の典型化を図った自伝風小説である。

『八景』の解説を読むとおもしろいことに気づかされる。小松左京「解説」一九七四年は、「「ごくあたり前」の少女の物語」としつつ「フィクションの形をとった、お聖さんの自伝といっていいでしょう」とファジーな表現をしている（註11）。小松伸六「解説」一九八八年は、「自伝的作品」としつつ、「多少の戯画化がみえる」とお茶を濁している感もする（註12）。浦西和彦「解題」二〇〇四年は「自伝風作品」と位置づけている（註13）。「自伝風」に落ち着く。真っ向から「自伝」と評するのが困難な作品であることが、今回の公開された「日記」によって詳（つまび）らかになったと考える。

参考
田野　登「軍国少女の生きた福島界隈ー田辺聖子『私の大阪八景』を読むー」（『福島区歴史研究会会報　第十三号』二〇二〇）

註

註1　『田辺聖子全集』第一巻　集英社　二〇〇四　解説五三七頁
註2　前掲註1と同じ
註3　前掲註1と同じ
註4　田辺聖子『欲しがりません勝つまでは』ポプラ社　一九七七　二四〇～二四一頁
註5　一九九七年五月一六日「日本経済新聞」「私の履歴書」
註6　『田辺写真館が見た“昭和”』文藝春秋　二〇〇五　二二六頁
註7　「サンケイ新聞」一九八一年三月二六日夕刊「oh！関西「福島〈三〉」」
註8　前掲註7と同じ
註9　『写真で見る福島の今昔』福島区制施行五〇周年記念事業実行委員会　一九九三　大阪市福島区役所　これと同じ文章は同年刊の『福島区史』にも見える。
註10　前掲註9と同じ
註11　『私の大阪八景』小松左京「解説」二七三頁
註12　『少年少女日本文学館』第二九巻　講談社　一九八八　小松伸
註13　前掲註1　浦西和彦「解題」五四九頁

ドラマ「芋たこなんきん」再放送

田辺聖子さんが主人公のモデルのドラマ「芋たこなんきん」（2006～07）がＮＨＫＢＳプレミアムで再放送されます。初回は３月２８日。

会員 **大垣禎秀さん** が
2021年度「地域福祉推進功労者ボランティア個人の部」で市長表彰されました。
10年にわたり支援学校生徒や障害児童の援助、高齢者の通院介助などされました。

おめでとうございます。

近傍の「往事点描」

岡倉光男

最初に、私事ながら筆者は二〇二二年一月、米寿になった。

昭和二〇年（一九四五）九月に、学童疎開から帰って、下福島三丁目、現在の野田二丁目に住み、昭和五〇年からは玉川三丁目に住むように成る。

往事、身近に起った故事や、今は無き建築構造物等に付いて、記録に値すると思うものを、この際書き留めて置く。

一　船津橋関連

先の「アジア太平洋戦争（第二次世界大戦）」後の混乱期、今の船津橋北詰上流側水面によく「土左衛門」が浮いているのを見た。堂島川最下流右岸だが、川の上に張り出して、違法建築の建物が三軒（喫茶フジ・大衆「食堂」・大和給食（店子はよく代わる））在り、床下の支えに、木製の元電柱を転用、多数を杭にして、川底に打ち込んでいたので、流れが澱んでいたのだろう、同じ場所で、水死体を五体以上は現認したが、犯罪絡みでなく、全部が飛び込み入水の自死体で、例外なく男性は俯け、女性は仰向けでした。当時は、生活苦を救済する機関も少なく、多くは鬱に落ち込んだ人達と思われる。

同所は、満潮時低塩分の汽水帯で、昭和五年に、中央卸売市場開設準備の川浚え中、全長六・三二メートルの古代の丸木舟が、川底から揚げられた場所でもあり、現在、その刳舟所有者は府立北野高校、現物は、大阪歴史博物館蔵で、発見以後、現場は「船津橋遺跡」と呼ばれている。

川の水質は、戦後五・六年は透明で、川底がよく見えていた。近所の童子達と船津橋と上船津橋の間に架かっている、水道パイプ橋下の辺りで、よく泳いでいて、水上警察のモーターボートが近づいて来ると、急いで岸に退散したものだった。

二〇〇九年二月六日付、毎日新聞「わが町にも歴史あり」に、宮本輝氏の『泥の河』が取り上げられている。小説中の土佐堀川右岸に二隻舫っていた舟（戦後すぐには石炭を運んでいた舟を改造）に水上生活者の家族が住んでいたのは事実で、上流側は名前を木村さんといった。筆者は五・六才年上の、そこの兄さんと、当時親交が在り、毎夕私の隣家に用の有った木村さんと、よく逢っていたことがある。

新聞記事では、船津橋の坂について、当時、市電が走っていて橋に坂があったとは考えられないと書かれている。実際は、中央市場の正門の前は、橋に向かって上り坂で、中央市場前停留所は坂を下った先、我が家の新聞販売所の前にあった。特に重量物を積んだ荷馬車は、直行では坂上へ進めず、広い市電道を斜めに進むことによって、少しでも勾配を軽減して、ジグザグに駆け上がっていた。

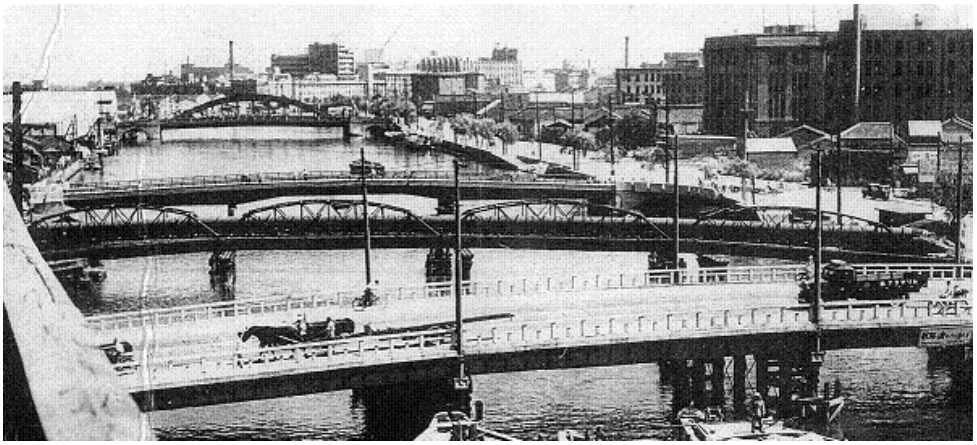
市電の線路に馬の蹄が重なり、摩擦低下で滑ると、後ずさりして、どさっと横倒しに倒れる馬を、よく見かけた。

新聞記事では、書いた記者の名前が署名されているが、馬車が後ずさりして、馭者が死んでしまう小説中の場所を、土佐堀川右岸、中之島の端建蔵橋北詰へ上がる短い坂だと比定されている。幹線道路で無い一本松海運の前の道路は、宮本輝氏が一時居を構えていたマンショ

ンがあり、荷馬車の通る道で無く、現在は阪神高速神戸線の中之島西入口のスロープが設置され、書かれた当時の道路は無い。

宮本輝氏の『泥の河』では、荷馬車は北行きで、比定に無理がある。あくまで小説・創作で著者の自由な発想は、時として現実味を、超えているのだろう。

小説「泥の河」舞台の地　碑
湊橋南側（西区）



手前が船津橋、馬が通る。
中央卸売市場管理棟より撮影。
昭和二〇年代半ば。

二　堂島大橋関連

この記事の数週間前、堂島大橋を取り上げての記事では、橋の四隅にある噴水の器を、馬車馬の水の飲む処と記事にあり、あまりにも酷（ひど）い間違いなので、入手した橋の設計図を、新聞社の署名記者に送ったが、返事が無く、余分な事だったかと思ったが、地方版とは言え、影響力の強い大手マスコミ記事だけに、信用する読者に伝える間違った内容は、読者軽視に他ならず、失望と共に悲しく感じたものだ。

堂島大橋は二〇二〇年、二年越しの大規模改修工事が終っているが、戦災時に焼夷弾の落下で、歩道に敷かれた木煉塼が長時間燃えて、その際焦げて黒ずんだ、四隅に在る噴水のコンクリート容器は、モニュメントの様にそのまま置かれている。

歩道の欄干寄りに在り、荷車を引いた馬が、溜まった水を飲めない場所にあることは、一見して分かる筈だが。

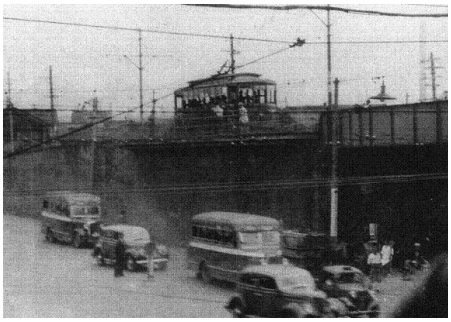
の隅はの板４柱前名る親事の橋あの工も

容器の中には撤去資材の一部が説明とともに展示されている

三　玉川交差点周辺状況

馬車馬の水飲み場は、近辺では、玉川四丁目交差点ガード下にあった。コンクリート製で矩形、二頭が同時に飲める大きさで、深さは三〇センチ程、低い位置にあった。その右手に公衆便所の建物があり、北東側、地上遮断機がある国鉄西成線と、平行して走っている市電があり、北行き野田阪神駅前への市電が、その上を跨線橋で立体交差していた。

高い位置にある跨線橋南詰に、市電玉川四丁目停留所があり、乗降客は直角に曲がる長い階段を利用した。戦後設立年は不明だが玉川四丁目交差点東南角ビルの地上に玉川シネマと地下に玉川東映の映画館があった。又、玉川三丁目停留所を真南へ、路地を入った右に、玉川映画劇場（野田三丁目五―二七）もあった。昭和三三年には、映画産業が、手近な娯楽として、観客数のピークを記録したが、次第にテレビが普及するに付け、入場者が減少し、映画館から一時、お芝居や魔術ショウの演目場となり後、廃館に追い込まれた。地下の元映画館（玉川東映）は、広い空間を利用してアルバイトサロンに転業、地上の映画館は二階廊下ロビイのスペースを、一時、市会議員立候補者の選挙事務所に使用していたことがある。その後、玉川会館ビルに更改、夜明けまで営業のサウナ店他、プールが在って泳いだ事があると言う人が居り、ちゃんこ鍋店・カラオケ店等が入っていたが、現在は、ピュア玉川２のマンションとオモテビルに建て替わった。



高架の市電

玉川シネマ会館　昭和30年頃

四　下福島消防出張所の事

次に、中央卸売市場正門前の道路、正式には大阪臨海線に面して設置されていた、福島消防署管轄の下福島出張所（玉川三丁目四―二〇）について、書き留める。

昭和一一年（一九三六）一〇月、二階建て鉄筋の建物で、消防車が二台駐車出来る、こじんまりした出張所が、朝日橋消防署管轄で開設、その後、左右の建物が強制疎開で、立ち退き更地にされるも、さすがに消火使命の施設、残されて建っていた、その並び南側に、大型の二〇人以上入れる防空壕が造られた。戦後二・三年で復興、周辺に家が建て込んだ。昭和三八年三月に福島消防署（新設）の管轄になる。戦後暫くして、中学生だった私（筆者）は、多分当時は規律が厳しく無かったのか、所員複数と親しくなり、消防建物内を自由に出入りさせて貰っていた。屋上からの望見や、二階から一階へ、急いで降下する為の、真鍮製の棒が垂直に立ててあり、縋（すが）り付いて何度も降下したことがある。数秒を競うための施設に、感心した。

私宅の一軒おいて隣に、戦後間もなく鯨肉の倉庫があり、早朝上部が燃えているのを、朝刊配達員が見つけ、向かいの消防出張所に急報、

消防車を出さずにホースを長く引っ張り伸ばし、市電道路を横切って活動、瞬く間に消火したことがある。その他、近辺の火の気のない、不審火と思われる火災を、ボヤの段階で消し止めて貰った事が三度、誠に近くに在って、心強い頼りの施設であったが、平成八年五月に、合理化の一環で廃止、建物も壊された。

先般、福島区役所に有った、明治初期の古文書中の地図に、下福島消防出張所の前から、南へ八間道路を横切って、八尾水産の前を通り、堂島川に至る一車線の細い道路名に、「船津橋筋」と書かれているのを見て、新と上（かみ）の船津橋が出来る以前は、盛んに利用された、人通り筋で有ったのかと偲ばれた。

大野町通り

『大阪府全市町村地図帳＆道路図』ナンバー出版　一九八三　より

五　その他

大阪市内に、一時二〇数ヵ店を構えていた、喫茶ミツヤのルーツは、今の野田二丁目二―一五に、戦前から居住されていた小儀さんのかき氷店で、小儀式氷削機を佐吉さんが考案し、昭和一八年、ご子息の米蔵さんが喫茶店を開業されたが、兵役で中断、復員後再開された。『写真で見る福島の今昔』（一九九三）四八ページに「小儀式氷削機総発売元」の大きな看板を掲げた店の写真がある。

野田二丁目五、大野町通り東より入ってすぐ右側に「洋食やなぎ」とその三軒隣に、元「柳屋食堂」があった。『泥の河』は一九七七年七月に発表。文中の「やなぎ食堂」の店名のヒントは、川を越えた既設の店名を、参考にされたのではと推量する。

参考文献

『福島区史』大阪都市協会編　大阪市福島区役所ほか　一九九三
『創立一〇〇周年記念誌』大阪市立野田小学校　二〇〇三

会員　**吉崎昌作さん**
が2021年「旭日双光章」を受章されました。
永年のスポーツ振興における功績が認められたものです。

おめでとうございます。

［新型コロナ禍の二〇二一年］

二年目のコロナ禍で経験したこと

末廣　訂

一　巣ごもり生活の二年目が始まるとは

二〇二〇年の春先から、降って沸いたような新型ウイルスが、一年間で収まるどころか、大きな山が第五波まで押し寄せ日本人を苦しめてきた。しかもこの二〇二一年末にはオミクロンという新型の変異株が世界各地で急増して、日本政府は第三回目のワクチン接種が早くできるよう対策中である。年末現在、日本はやっと第五波が大幅に下降して収まりつつある中で、今後のことが心配である。

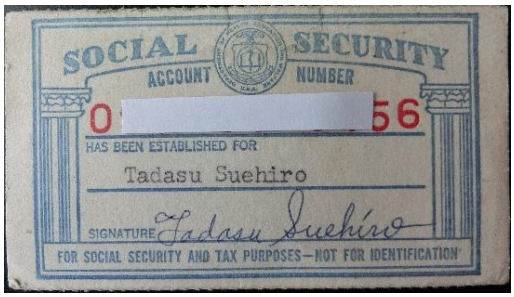
と、ここまで書いて、二〇二二年に入り、爆発的に拡大し、一日一〇万人を越える感染者が確認されるようになった。

二　糠喜びをした「アメリカ合衆国からの小切手」

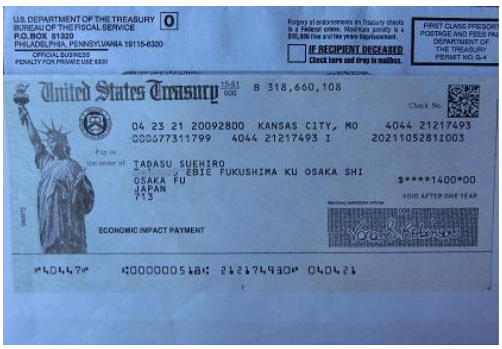
二〇二〇年はコロナ対策で政府は国民一人当たり一〇万円の給付金が支給され、今年も一八歳以下に岸田新政権は再度支給すると発表があるも、その支給方法で地方自治体と、もたついている。いずれにしても、日本はこのような事態にデジタル化やＩＴ化ができていないため、スムーズに進めず、実務は地方自治体任せになっている。

アメリカ合衆国で六年間生活した結果、元駐在員の一人としてアメリカのコロナ給付金をもらい損ねた話をします。

もう五五年以前になるが、入社四年目にアメリカ赴任の辞令でニューヨークに本社があるアメリカ松下（ＭＥＣＡ）に出向した。アメリカで雇用資格があるＥ―１ビザを事前に取得し、初めて乗った飛行機、ＪＡＬ・ＤＣ８で羽田を飛び立った。早速現地でもらったカード（左写真）がいわゆるソーシャルセキュリティカードである。



ソーシャルセキュリティカード



日本でいうマイナンバーカードと同じであるが、アメリカのカードはただ単なる紙のカードである。重要なことはこの「個人ナンバー」であり、このナンバーが政府や金融機関等とつながっているかどうかであると思う。アメリカではこの個人ナンバーがないと銀行口座の開設ができないし、税金の申告や免許書の取得、将来の年金の受け取りも出来ない。細かいことはわからないが、もう五０年前にはこのような仕組みというか、制度がアメリカにあり、外国籍の人でもアメリカ人同様に扱っている。したがって、今回の事例のように、私にも、ア

メリカ合衆国のコロナ給付金を自動的に送ってきたようだ。

二〇二一年四月末、住所と宛名が英語名でＭｒスエヒロ宛のレターが届いた。

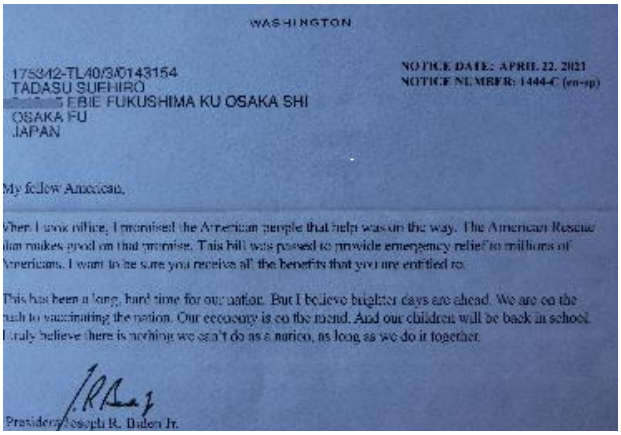
早速開封してみると、一枚の小さな紙に名前、住所の右下のサインの上に一四〇〇ドル（約一五万円）を表記した小切手であり、それ以外には何の説明書も入っていなかった。年金額にしては時期も金額も異なるので、今頃、アメリカ合衆国から高額なプレゼントが日本に住む元駐在員に何故きたのだろうかと不思議に思った。

早速ＮＹ在住三五年のパナソニックで同期のＴ君にメールをした。すでにＴ君には小切手について二〇人ほどの問い合わせがあり、「これは何なのか・本当にもらえる資格があるのか・どのようにして円に換えるのか」等々の質問があったようだ。

Ｔ君から「今回の小切手は、米国民のコロナ対策の三回目の支給であり、米国以外の居住者にその受給資格があるのかが問題である」と助言があった。また「受給資格云々について、我々日本人はわからないので、しばらく小切手をキャッシュ化しないで、様子を見ること。小切手は一年間有効ですから」とアドバイスがあった。

その後、詳しい情報がないまま、時間がたち、今度は「バイデン大統領署名の手紙」が届いた。

私は情報を得るために、取引のある三井住友銀行に行くと、西野田支店では取り扱っていないので、大阪駅前の旧シティバンクを紹介され、行ってみると、多くの方が来てロビーは混み合っていた。銀行の行員いわく「銀行でも、詳しい情報が入ってなく困っている」とのことであった。


WASHINGTON

NOTICE DATE: APRIL 22, 2021
NOTICE NUMBER: 1444-C (en-up)

175342-TL40/3/0143154
TADASU SUEHIRO
[illegible] 5 EBIE FUKUSHIMA KU OSAKA SHI
OSAKA FU
JAPAN

My fellow American,

When I took office, I promised the American people that help was on the way. The American Rescue Plan makes good on that promise. This bill was passed to provide emergency relief to millions of Americans. I want to be sure you receive all the benefits that you are entitled to.

This has been a long, hard time for our nation. But I believe brighter days are ahead. We are on the cusp of vaccinating the nation. Our economy is on the mend. And our children will be back in school. I truly believe there is nothing we can't do as a nation, as long as we do it together.

President Joseph R. Biden Jr.

大統領からの文書

五月に入って、日経新聞や朝日新聞が本件の小切手についての記事が出た。

双方の記事の結論は、「元米国駐在員に届いた小切手は、コロナ対策給付金を日本に誤って送ったものである」とあり、「永住権がなく換金すれば違法となる」とのこと。

何とも言えない人騒がせな今回の小切手で【美味しいケーキが届いたので食べようと口を開けたら夢だった】という話に終わってしまった。

米現金給付 日本にも誤配
元駐在員らに小切手届く
米国から突然 1400ドルの小切手
駐在経験の高齢者らに次々
コロナ対策給付金の誤送付?

誤配の新聞記事

その後、しばらくの間、追加情報も来ないので、テキサス州のIRS当局に小切手の裏面に「ＶＯＩＤ」と書き、返送した。

ただ、何年ぶりで元米国駐在員の旧友や同僚たちと電話やネット情報交換ができ、お互いの近況が聴けたのがせめてもの救いであった。

三　巣ごもり中で「整理」や「まとめ上げた」もの

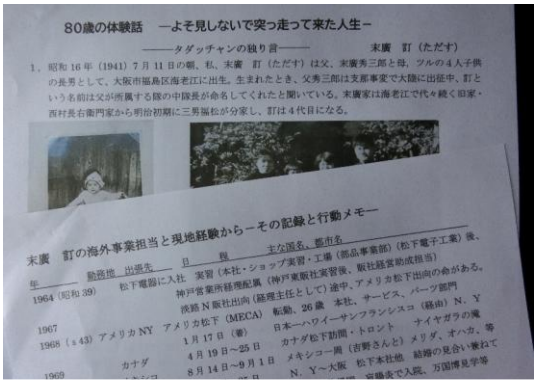
長い巣ごもり生活の中、アルバムの整理から始めたが、まだ処分するまでは至っていない。また、歴史研究会の三〇周年以降のチラシや資料を貼って模造紙六枚にまとめた。前回以降NO,9からNO,14の平成二九年まで展示できるようにした。

そして、鷺洲小学校増築の折に新たに移築した「橋の親柱と道標」の説明版を作るという話が出て、現在、銘板を制作中である。

二〇二一年、私は満八〇歳になった。前々から自分が生まれてこれまでの生きざまを一度まとめたいと思っていたので、昨年から会社生活を中心に過去の資料を出し箇条書きにした。この一二月に文章と写真とでＡ４で三二枚にまとめ上げることができた。

やはり中心の中身は三八年間お世話になった会社生活で、特に会社で担当した、海外事業担当と経理についてである。在任中アメリカとドイツの二回の赴任、その間、日本や現地から海外出張が約九〇回近く、パスポート八冊、四〇か国訪問したことになる。特に自分の場合は松下では珍しく一〇数回の転勤があり、名刺も二四回印刷した。回顧録は他人に見せるようなものではないが、自戒と反省の会社生活であった。

最後に、コロナで二度ほど中断していた、落語家の桂文枝師匠との懇談会が一〇月に区役所であった。出席者は小西連合町会長、福島区歴史研究会会員でのだふじの藤さん、やはり会員で福島商店会の草野さんと会長の私の四人で、区役所からは区長はじめ、幹部の方であった。二時間近く福島区の歴史や話題について話し合ったが、どうやら各区を訪問しており、今回も福島区のネタ探しのようだった。師匠曰く「まとめあがったら福島区民の方にお披露目をしたい」とのことで、楽しみである。



原稿（人生のまとめ）

文枝師匠（左から三番目、懇談会）

最後に・・・、海老江東小学校で一五年続いてきた、六年生に語り継ぐ「戦争体験の話」の日程が、オミクロン株の急速な感染拡大で二回流れた。しかし、どうしても続けたいという話が出て、卒業式一週間前ではあるが、三月一〇日の午後、講堂で話をしてほしいと連絡があった今年度も途切れることなく、私の四歳時の経験を子供たちに伝えに行く。

ノダフジに関わる新刊紹介

藤　三郎

紹介する文献

『フジ―総合ガイド―』藤　三郎著　文一総合出版　二〇二二年
　四月出版予定

『藤と日本人―藤の文化誌―』有岡利幸著　八坂書房　二〇二一年

『村野藤吾と俵田明―革新の建築家と実業家―』堀　雅昭著
　弦書房　二〇二一年

はじめに　―最近注目を集め始めたフジ―

二〇一九年四月九日、麻生財務大臣（当時）から「令和六年度に新札が発行される」と発表されました。新五千円札の表は津田梅子、裏面はノダフジがデザインされています。まさにフジは令和の時代を象徴する花木であると言えます。また人気アニメ「鬼滅の刃」第四部は、フジが鬼退治をするというストーリーになっていて、若者の間でもフジ人気が高まりました。これに拍車をかけたのが意外なことにコロナ禍なのです。コロナで巣ごもり状態になり、自宅で栽培できる盆養藤（鉢植えのフジ）の人気が高まり、二〇二一年の春、例年なら野田新橋筋商店街の花屋さんの店頭に並ぶノダフジの苗木が姿を消したのです。店頭に並んでいるのはヤマフジ系の岡山一歳フジでした。ノダフジはネットで高値で販売され、市場には殆ど出てこなかったのです。このような絶好のタイミングで表記二冊のフジの本が出版されました。

新5000円札にデザインされるノダフジ

フジは日本を代表する花木であるにも関わらず、日本には『ＮＨＫ趣味の園芸フジ』（川原田邦彦著、ＮＨＫ出版）という園芸書しかありませんでした。フジは気まぐれな花木で「こうすれば必ず咲く」という方法がないので、本に書きにくいのです。事実、フジ研究の第一人者と言われる塚本こなみ先生（「のだふじの会」設立当時指導を受けたフジの大家）も、「フジは奥が深く本には書けない」と言われていました。ましてやフジの園芸書と文化を合わせたフジの総合書は日本にはありませんでした。ところが意外にも海外にはそれがあるのです。オーストラリア生まれのアメリカ人、Peter Valder著『Wisteria Comprehensive Guide』（日本語訳　フジ総合ガイド）です。筆者はこの本に啓発され、「日本のフジのすべてを書こう」と、コロナのため時間に余裕が出来た機会に次の本を書き上げました。

一　『フジ―総合ガイド―』藤　三郎著

先ずは僭越ながら自分の本から紹介させていただきます。この本は二〇二二年四月、文一総合出版から出版予定ですので、本会報誌が出

る頃はまだ店頭に出ていません。第一部「都会にフジを咲かせましょう」、第二部「フジの文化史」、第三部「日本一のフジ十選」の三部からなります。

鉢植えのフジ

「お姫様のみたい！」と女性編集者に受けました。

第一部　「都会にフジを咲かせよう」では、冒頭に「鉢植えのフジ」の咲かせ方を掲げました。これを一目見た出版社の女性達は「わあ～フジが鉢植えで咲くんだ！」と興味津々、フジは藤棚でしか咲かないと思っていたようです。福島区内で時折見かけるベランダに咲くフジの写真を見て「お姫さまみたい！」と興奮したそうです。それが引き金となり正式な社内手続きを経て、出版の運びとなりました。前述のようにフジの園芸書には『ＮＨＫ趣味の園芸　フジ』があるのですが、この本に書いてあるとおりに管理しても都会のフジは咲きません。これは福島区ばかりでなく、東京の亀戸天神・奈良の万葉植物園・宇治の平等院などの名所のフジを管理している専門家にも確認しました。本書は、著者・川原田邦彦氏が居住する北関東の気候にあったフジの管理方法なのです。フジは生育する土地の気候・植栽環境・樹齢などによって管理方法が変わってくるのです。また、同じ方法で手入れをしても咲いたり咲かなかったり、手入れをしているのに咲いているフジが突然咲かなくなったりします。

これを研究者の眼で、バラバラに見える現象を体系化（一般化）しました。まとめるに当たっては一〇数冊の植物の専門書を読み込み、各地の藤名所を訪れ、その管理者からヒヤリングを繰り返し、内容に間違いないか確認しました。最後に大阪市立自然史博物館の菌類と植物を専門とする学芸課長・佐久間大輔氏に査読していただきましたところ、そこそこに目を通し、「まあＯＫ！」ということで、ご懇意な出版社に直接紹介してくださり出版の運びとなりました。

第二部「フジの文化史」の前半では、万葉集や平安時代から中世にかけての藤の和歌について、時代と共に藤の和歌の意味の取り方に変遷がある事や、「植物としてのフジ」と歌人たちの関わりを描いてみました。後半は「野田の藤」の歴史が中心です。「二十一人討死の合戦」、野田城を巡る「野田福島の合戦」、大坂冬の陣での「野田福島の合戦」など、およそフジとは関係のなさそうなこともかなり詳しく書きましたが、編集者によると植物に興味のある人は、その歴史にも興味を持って読むとのことです。秀吉の藤見物や江戸時代の「吉野の桜・野田の藤・高雄の紅葉」と童歌に詠われた野田藤の最盛期を経て、藤の棚の歌人・矢沢孝子の和歌に見られるノダフジの消滅までの過程をたどりました。これらの執筆に際し、福島区歴史研究会の会報誌などに投稿していた資料が役に立ちました。これらがなければ、とても一年でこの本をまとめることは出来ませんでした。

第三部「日本一のフジ十選」はひと工夫した部分です。いずれの藤名所のフジもそれぞれに美しく、特定のフジについて「これが日本一美しい」ということは難しいですが、客観的に「日本一」と言えるフジが各地にあります。例えば樹齢が日本一の「牛島の大藤」、品種のコレクションが日本一の「河内園のフジ」、藤棚の長さが日本一の「日高川のフジ」等々。福島区は、「日本で一番フジが沢山咲いている大都会」と言って間違いありませんので、十選の最後に加えました。本書出版により福島区のフジは、全国的に知られるようになるでしょう。

本書編集の舞台裏をご紹介しましょう。この文一総合出版は、マニアや児童向けの「鳥」・「昆虫」・「植物」の本を専門とするネイチャー系の出版社で、内容の正確さにこだわりを持っています。編集に取りかかる前に、写真や本文の細かいところの版権・著作権や出典元の調査など準備に三ヶ月くらいかけたようです。本書には書かれていませんが、編集者との間で次のようなかなりハイレベルな「文学論争」がありました。

◇ むらさきの　色し濃ければ　藤の花　松の緑も　うつろひにけり

（『躬恒集』一七七）

この和歌はフジの色が濃く松の緑の影が薄いと言うことを、「藤を藤原」、「松を天皇」に見立て、「当時急速に勢力を伸ばしてきた藤原氏の為に、天皇家の影が薄い」との解釈を入れて見てはどうか、と編集者からのアドバイスを受けました。確かに中世藤の和歌ではその様な解釈は可能なのですが、まだ平安時代中頃にはその様な寓意はありませんでした。私は「この和歌は法皇が石山寺に御幸の折に準備された屏風の絵を題にしたもので、天皇家に失礼なその様な意味は絶対にない。単なる叙景の和歌である」と答えました。

◇ 松が枝に　かかるよりはや　十かへりの　花とぞさける　春の藤波　『新後拾遺集』一五二（足利）義満

「この歌は国会図書館のデータベースでは作者不明となっている。どこから引いてきたのか？」との質問がありました。私は「この和歌の詞書に、百首献上　左大臣　藤」となっており、左大臣とは義満のこと」と答えました。種を明かせば、中世和歌研究の第一人者・岐阜聖徳学園大学・名誉教授の安田徳子先生に前もって確認を取っていたのです。

◇ 「大坂冬の陣」で、野田の新家を守っていた武将名を「宮島備中守則秀」と「樋口丹後守兼興」としました。

『第一西野田郷土史』にそうなっていたからです。ところがデータベースでは「宮島備中守兼興」になっているからこれに替えたらどうかと言われました。『西成郡史』『鷺洲町史』『大阪市史』『大阪府史』『大阪府全志』でもはっきりしません。窮余の一手で、大阪城天守閣の研究副主幹・跡部信氏に問い合わせたところ、『大坂の陣豊臣方武将人物辞典』と『難波戦記』を参照し、「私が書いたとおりで問題ない」との返答を得ました。出版社がそこまでチェックするかと、なかばあきれておられました

◇　その他、英文を翻訳した箇所は、誰かの引用か、自分で翻訳したか（自分で翻訳に決まっている！）、矢沢孝子の顔写真はどこからとってきたか、等々ずいぶん細かいところまでチェックされました。

◇　二〇二〇年三月、有岡利幸著『藤と日本人―フジの文化誌―』が出版された時は既に本書出版が決まっていましたが、一瞬「先を越されたか！」とギクッとしましたが、早速取り寄せて読んでみるとバッティング（同じことを書いている）している箇所はなく、一字一句修正や変更する必要がないことが判りました。両者ともに「我が道を行く」「自分の土俵で相撲を取っている」ようなもので、競合する余地は殆どなかったのです。例えば有岡氏の「フジの文化誌」は、古事記から平安時代が中心なのですが、拙著は中世から近世、特に野田藤の歴史に重点を置いています。又前者が民俗学的な切り口で書かれた教養書であるのに対し、後者はフジの実用書を目的に書かれており、立ち位置が違っていたのもバッティングしない理由でした。同じ「フジの文化誌（史）」でもこれだけ違うものです。出来れば読み比べてください。

◇　東京・亀戸天神の初代のフジ（今のフジは三代目）は、元禄時代、野田から移植されたフジです。このフジの管理方法を調査するため同地を訪問したところ、菅原道真公の直系の子孫にあたる大鳥居良人権宮司の出迎えを受け感激、メインスピーカーの樹木医・小池徹夫氏は、塚本こなみさんや故・澤田清氏（いずれも「のだふじの会」活動の初期に指導を受けた樹木医）と樹木医資格取得の際の同期生。また同席者の中に八坂神社・西野千尋宮司のご友人で國學院大學での同期生（土田晃久氏）もおられました。この訪問で遠いものに感じていた亀戸天神のフジが、急に身近な存在になりました。

なお、この本は『なにわのみやび野田のふじ』〈東方出版　二〇〇六〉『よみがえった福島区の花のだふじ』〈自費出版　二〇一七〉に続く三冊目の単行本です。

二　『藤と日本人―藤の文化誌―』有岡利幸著

作者の有岡利幸氏は、一九三七年、岡山県生まれ。一九五六年～九三年まで、大阪営林局で国有林における森林の育成、経営計画業務に従事。その後二〇〇三年まで一〇年間、近畿大学総務部に勤務。二〇〇三年～二〇〇九年まで（財）水利科学研究所客員研究員。一九九三年には第三八回林業技術賞を受賞。『森と人間の生活』『松と日本人』など著書多数。まさに松・桜・松茸・秋の七草・春の七草・梅・檜・桃・柳・欅・椿など、まさに日本の代表的な木について、すべて知り尽くした方です。作者は長年各地を廻られていますので、地方に眠っている伝承や言い伝えまで発掘しながら書き進められており、全編読み応えのある内容です。事実ばかり書かれているのでなく、随所になかなか常人には思いつかない作者独自の鋭い見解を加え、読んでいて大変興味深いですのでその一部を紹介したいと思います。

◇　垂姫の藤

万葉集に大伴家持が詠んだ長歌（巻十九-四一八七）に

「六日布勢水海に遊覧び作れる歌一首　并に短歌

（前略）布勢の海に　小船連並　真櫂懸け　い漕ぎ廻れば　乎布の浦に　霞たなびき　垂姫に　藤波咲きて　浜清く　白波騒ぎ　しくしくに　恋は益れど　今日のみに　飽き足らめやも　斯しこそいや年のはに　春花の　繁き盛りに　秋の葉の　もみゆる時に　あり通ひ　見つつ偲はめ　この布勢の海を」

この「垂姫」は通常地名とされていますが、著者は「フジの枝が巻き付いている木から重みでU字型に垂れ下がった様子」を描いている。なるほどとうなずけます。「垂れ」下がったフジに愛称の「姫」をつけて長歌に詠んでいるのです。

◇　古代中国人のフジ嫌いを無視した貴族達

中国の有名な詩人・白居易にフジの生態を詠った「紫藤」という題の詩があります。

「藤花は紫にして蒙耳　藤葉は青くして扶疎　誰かいう好顔色と然も害をなすこと余有り　下って蛇の屈盤するが如し　憐れむべし中間の樹　束縛されて枯株となる　柔夢自から勝へず嫋々として空虚に挂る　豈知らむや樹木を纏うて千夫の力も如かざるを　**先に柔にして後には害をなすこと　諂佞**（相手に気に入られるように振る舞うこと）**の徒に似たり**」

フジは若木の時は弱々しく、たかくまで伸びて陽光を求め、樹木を頼って絡みつき、いったん梢まで達すると、そこで枝葉を十分拡散し繁茂する。そして巻き付いた樹木の生育に必要な陽光を奪ってしまう。また絡みついたツルは幹を痛めつけ、樹木にはなはだ害を与える。

このような生態のため。フジは古代中国人に嫌われていました。何事も中国を師と仰いでいた当時の貴族達は、白居易のこの詩を十分知っていながらそれを無視していました。作者はその背景には当時の貴族達の藤原氏へのおもねりがあったのではないかと考えています。これもなるほどとうなずけました。

◇　「藤狩り」という風習があった？？？

奈良時代の人はフジをはじめ季節の花を挿頭に刺す風習がありました。万葉集に「春日野の藤は散りにて何をかも御狩りの人の折てかざさむ」という歌があり、作者は「**藤狩り**に出かけたが花はもう散っており挿頭には何の花を挿したのだろう」と独特の解釈をしています。筆者の知る限り、当時の人々は春先に薬草狩りをする習慣があり、ここでいう「御狩り」は「薬草狩り」を指すのだと思いますが。作者も「藤狩り」という言葉は文献にはないと、断っていますが、突飛な発想が面白い。

◇　本書は古事記・万葉集に始まり奈良時代を経て、伊勢物語・源氏物語など平安朝時代の藤から、藤娘・藤の家紋・藤原氏・藤の伝説・薬用植物や食用としての藤など、民俗学的視点に立った幅広い話題が満載されている。ついで各地の藤名所の説明を経て、中世・近世は飛

ばして、「正岡子規と亀戸天神の藤」と続く。「野田村の藤」については、わずか一頁しか割かれていない。長岡造形大学教授・飛田範夫の『大坂の庭園』には、「野田の藤」について「一本の木の歴史が鎌倉時代から現在まで文献でたどれる例は少ない」と言われるほど豊富な文献が残っているにもかかわらず。最後に「鬼滅の刃」にふれ、フジは鬼を倒せるか論じている。本書は植物の本というよりも「日本人の教養」の本として捉えた方がよいと思う。カラー写真も美しい。兎に角、著者の博学多識には敬意を表したい。

三　『村野藤吾と俵田明』堀　雅昭著

二〇二〇年の秋、「藤の棚」がとりもつノンフィクション作家・堀雅昭氏との出会いがありました。

◇　著者紹介

著者の堀雅昭氏は、一九六二年山口県宇部市生まれ。山口大学理学部卒。山口県や宇部市に関係した人物や歴史について、徹底したノンフィクションで著書を多数著しておられます。代表的な著書に『井上馨（開明的ナショナリズム）』、『靖国の源流』、『靖国の誕生（幕末動乱から生まれた招魂社）』、『鮎川義介（日産コンツェルンを作った男）』、『寺内正毅と近代陸軍』

その他多数の著書があります。予断を交えず徹底して事実にもとづき著作活動を続けられている。

作者の祖先は靖国神社初代宮司の青山上総介（清）であり、靖国神社の起源が「禁門の変」の責任を取って自刃した宇部領主・福原越後をはじめ明治の動乱期の官軍の戦死者を祭る招魂社にあることなど、明治維新と郷里・宇部との関連を掘り下げた作品が多い。

現在の「藤の棚」と堀氏

下福島公園の「藤庵」にて

◇　堀雅昭氏の「藤ノ棚」付近の調査

二〇二〇年一一月二〇日、福島区役所からの紹介で、堀雅昭氏が現地調査のため私のところへこられました。その目的は、宇部興産グループの創業者・俵田明が、明治三六年（一九〇三）三月に大阪の「藤の棚」と言うところに住んでいた兄の俵田軍太郎をたよって転がり込んで来たというのです。俵田は、既に興成義塾を卒業していましたが、正規の中学校ではなかったので、中学校の卒業資格を取るためでした。この「藤の棚」は一体何処なのか？著者はかなり苦労して探されたようです。この付近が「藤の棚」と呼ばれていたことは殆ど知られてお

りませんが、「藤の棚の歌人・矢沢孝子」については既に会報誌（第十号「藤の棚の歌人・矢澤孝子」）で紹介しました。私のところには、住所が「藤の棚」で配達された新聞社からの葉書も残っていました。現在のフジの棚や、おそらく俵田明が通ったと思われる野田恵美須神社前の「宝湯」の跡や、彼が中等学校の補習を受けるため、西区江戸堀の泰西学館までの通学路であった下福島公園付近を案内しました。俵田明は大阪府立北野中学校に合格し、中学卒業の資格を手にすると、九月には大阪英語学校に入学して明治三八年（一九〇五）六月まで「藤の棚」から約一年半通学していました。この時の訪問の様子が、『村野藤吾と俵田明』の「大阪「藤ノ棚」」の項（Ｐ３２～３４）に、次のように記されています。

「俵田が若き日を過ごした「藤の棚」を歩いてみた。江戸時代「藤之宮」の名で知られたノダフジ（野田藤）で有名な大阪市福島区玉川二丁目の界隈である。現地にはノダフジにまつわる春日神社の祠が鎮座していた。隣接する藤マンションを経営する藤三郎さん（昭和十四年生まれ）が、代々ノダフジを守ってきた藤家十八代目で、その春日神社がかつての「藤之宮」だったことを教えてくれた。江戸時代に野田村庄屋だった藤家は、藤マンションの近くに屋敷「藤庵」を構えていた。しかし戦後の都市開発期に処分したそうで、今そこは阪神高速が通る。一方で「藤庵」の庭だけは近くの下福島公園の東側に移設復元されていた。藤家は明治大正期に周辺に多くの貸家を有し、俵田軍太郎もそんな借家のひとつに住んでいたのではないかという。藤家に残る「玉川町一丁め藤ノ棚」の住所（写真上）から、そのことが推察できた。藤さんが「多分このあたりに住んでおられたのでしょう」と口にしながら周辺を案内してくれた。近くの恵美須神社の東側の鳥居の前で、「ここに明治時代から営業していたという「宝島（筆者注・「湯」の聞き違い）」という風呂屋が昭和の終わりまでありましたので、俵田さんも入られたと思いますよ」と言うのである。

一方で俵田が学んだ泰西学館は、キリスト教の学校として明治一九年に中之島に開設されていた。校舎の移転や経営難を経て明治三十一年に一度廃校になったことでキリスト教の経営から離れ、俵田が通った時期は、藤さんの家からさほど遠くない靭公園（大阪市西区靭本町）あたりに所在していたようだ。俵田が専門学校入学資格を得るための試験を受けた、大阪府立北野中学校跡を示す記念碑も、阪急電鉄の大阪梅田駅近くの済生会病院の前庭に建っていた。明治三十六年九月に入学したという英語学校が、時を同じくして大阪市の認可を受けて「大阪青年会英語学校」と改称した大阪ＹＭＣＡ経営のキリスト教系の英語学校だったことも、現地を歩く内に見えてきた。（中略）ここに俵田は明治三十七年六月まで通ったようなのだ。その時学んだ英語が、昭和戦前期の二度に渡る洋行で役立つのであった。若き日に自ら勉学に励んだ大阪は、俵田にとって思い出の地であった。」

◇　その後の俵田明

俵田家は、前出の福原越後の家臣でしたが、他の士族と同じく明治維新後没落しました。大阪で苦学して中学校卒業の資格と英語力を身につけた後、明治三八年（一九〇五）一月に広島騎馬兵第五連隊に入営し、大連に渡りました。しかし九月には講和が成立したので帰国。その後、働きながら勉強するために上京し、高輪の大村徳敏（大村益次郎の子孫）邸に下宿し、昼間は電気工事の下請け工事に汗を流しながら、夜は工手学校（現工学院大学）電気科に学びました。明治四一年、工手学校を卒業し、陸軍砲兵工廠に職を得た。しかしそれに満足せず、更に上級の資格を取るため大正二年（一九一三）秋、夜学の工手学校高等科電工学科に入学して一年学び大正三年九月に卒業しました。

しかし、大正二年三月、郷里・宇部の沖ノ山炭鉱の事務長だった兄・軍太郎の訃報が届きました。沖ノ山炭鉱を経営する渡邊祐策が東京まで訪れ、その誘いにより大正四年、宇部の沖ノ山炭鉱に入社しました。当時の欧米の最新鋭の設備・技術を導入するため、二度アメリカ・ヨーロッパを訪れています。ドイツなどから最新の技術を導入し、宇部グループの基礎を築きました。昭和一七年（一九四二）に沖ノ山炭鉱、宇部窒素工業、宇部鉄工所、宇部セメント製造を統合して宇部興産を設立し、同社の初代社長に就任しました。

また化学工業統制会など様々な公職に就いています。　昭和五八年（一九五八）逝去。享年七三歳。

俵田明には息子がおらず、娘・初枝の夫・属寛夫（さうか）が結婚を機に俵田家の婿養子となって俵田姓を継ぎ、後に宇部興産の副社長を務めている。なお現在の外務大臣・林芳正氏は俵田明の曾孫にあたる。

◇　建築家・村野藤吾

村野藤吾は明治二四年（一八九一）佐賀県の満島（現唐津市）で生まれた。俵田より七歳若い。幼少期は福岡県遠賀郡八幡村（現北九州市八幡東区）で育った。小倉工業学校（現小倉工業高校）機械科を卒業後、八幡製鐵所に入社したが、明治四四年（一九一一）から二年間にわたる従軍中、学問に興味を持ち、早稲田大学理工学部電気工学科に入学したものの、自分には向かないと大正四年（一九一五）、同大建築学科へ転学し、二七歳で卒業した。

渡辺節建築事務所に入所し日本興業銀行本店、ダイビル本館、綿業会館等の設計に携わった。昭和四年（一九二九）、村野建築事務所開設。昭和三〇年、日本芸術院会員。昭和四二年（一九六七）、文化勲章受章。日本芸術院賞、日本建築学会賞など受賞多数。　大阪を拠点に創作活動を行い、建築批評界では丹下健三とよく比較された。九〇歳を超えても創作意欲は落ちず、死の前日まで仕事をしていたという。

大正一〇年（一九二一）炭鉱労働者の急増を受けて、宇部が村からいきなり市になった。宇部市制施行は炭鉱町の文化を革新しました。渡邊裕策・俵田明が市制施行の祝いとして、スタインウエイのピアノを新川講堂に据えた。安価な風俗文化としてカフェーが登場し始めました。ピアノよりも庶民的なハーモニカブームがブームとなり、宇部には戦後ハーモニカ工場までつくられた。俵田明の養子・俵田寛夫は宇部好楽協会を盛り上げ、音楽活動を支援していた。市制施行から一

六年後に村野藤吾の設計で宇部に巨大な音楽堂、渡邊翁記念会館（平成一七年、国の重要文化財に指定）が、その時代の音楽文化の象徴のように建てられた。この設計を依頼したのが俵田明であった。これをきっかけに村野藤吾は宇部との関係を深めていった。宇部窒素鉱業事務所、宇部油化工業硫安倉庫設計図、宇部ゴルフクラブハウス計画案、宇部図書館計画案などが残るが、大部分案に終わり完成はしていない。宇部銀行（一九三九年）、宇部油化工業（一九三九年）、宇部窒素工業事務所棟（一九四二年）、宇部興産中央研究所（一九五三年）、宇部市文化会館（一九七九年）、宇部興産ビル（一九八三年）などが村野の作品として残る。琴芝に残る俵田明邸の応接間（音楽堂）は村野の設計によることが、本書執筆中の取材中に判ったそうだ。村野藤吾の作品は、大阪にもあったし現存する建物もある。今は姿を消したが、大阪「そごう」の地上七階、地下三階の堂々たる建築は彼の初期の作品です。前出の中之島の旧ダイビル、備後町の綿業会館など初期の作品には「革新」の血が感じられるという。俵田明が村野藤吾と出会ったのは、村野藤吾が大阪「そごう」を設計していた頃で、俵田明はこれらの建築を自分の目で確かめたのではないか、と著者は考える。若き日を大阪「藤ノ棚」で過ごした俵田明には、大阪が苦学しながら過ごした思い出の地でもあったからではなかろうか。

【追記】戦前の「藤ノ棚」には、「藤ノ棚の先生」と呼ばれていた長楽先生という医者、「藤ノ棚の歌人」と呼ばれていた矢沢孝子（会報第十号、二〇一八年二月）、そして若き日の俵田軍太郎・明兄弟が住んでいたことになる。下町ながらなかなかインテリの住む町だった。

春日神社　ノダフジ発祥の地

会員の原稿を
募集します！

福島区の記録を
残しましょう

尼崎城と城の東側大物周辺の散策

澤田耕作

緊急事態宣言が解除され、コロナ感染者数減少の中の一〇月二一日（木）、月例会終了後の午後に会員六名で散策に行きました。

阪神尼崎駅西改札からスタート、駅南側にある時計台（昭和天皇大典記念碑　昭和三年一一月建立）、その後ろに高い潮位表（室戸台風ＯＰ＋5.1ｍ　昭和九年一一月六日とジェーン台風ＯＰ＋4.3ｍ　昭和二五年九月二一日）があります。尼崎市は国道二号線以南はゼロメートル地帯です。

潮　位　表

駅沿いに東へ歩くと、赤煉瓦の阪神電鉄旧火力発電所（明治三七年建設）と尼崎城復興天守閣（平成三一年三月二九日築城）が見えてきます。

西外堀だった庄下川を越えて城内へ、現在城内公園となっている所は北外堀でした（城絵図などを示して）。戸田氏鉄（初代尼崎藩主）と契沖（尼崎藩生まれ、国学者・阿闍梨）の顕彰碑の前を通り、天守閣（本来の天守跡は東南へ三〇〇ｍ、現在尼崎市立歴史博物館の所にありました）を横に見て、向いの桜井神社（明治一五年建立）へ、神社は桜井松平家歴代藩主を祀っています。社殿前には本丸御殿の棟瓦、松平三代藩主忠告公の俳句（まづ霞む　竈々や　民の春）が外堀にあった石杭に刻まれています。横には博愛社（最後の七代藩主松平忠興公が設立した組織、後の明治二十年日本赤十字社に改称）記念碑もあり、近頃は嵐の桜井君ファンの方がお参りに来ているそうです、ここまでが西三の丸です。

神社を出て二の丸・本丸だった明城小学校運動場西側に、フェンス越しに運動場（御殿のあった場所）を眺めていただき、栞の「本丸御殿間取図」をもとに簡単（藩主居住部分・政務部分・貴賓客部分区分等）に説明しました。次に阪神高速神戸線・四三号線傍ら、明城小学

校前（南西側）の尼崎城址の石碑（明治二一年建立　内堀の石杭）前で、大正初期の小学校（尼崎第一尋常小学校）、昭和三十年代の写真で変化を見ていただきました。

小学校を離れ、東の道路、東青山線は昭和五九年まで尼崎港線が走り、南城内（現在高架下部分　西の三の丸・四角堀・南浜）に国鉄尼崎駅（のち尼崎港駅）がありました。また引込線は旭硝子、日本硝子、住友金属工業に繋がっていました。阪神高速神戸線・四三号線の高架の下（五家老屋敷）を通り抜け、築地城内橋上より南外堀（庄下川の下流）、遠く六甲山を眺め、城内を出ました。

旧大黒橋を渡り、中国街道大黒橋跡の石碑前を通り、阪神大物駅からの道路、東本町線を越え、東へ辰巳八幡神社に、神社には辰巳橋遺跡（鎌倉時代の港町の痕跡）、辰巳渡仇討址（藤堂高虎家来妻の夫の仇討ち）・伝静なごりの橋（義経と静御前の別れ）の石碑がありました。ここは尼崎街道、大和田街道の終点辰巳の渡しがあった辺りです。

左門殿川の高～い堤防（超えると佃島）、また阪神高速神戸線・四三号線の高架下を抜けると尼崎市の東部下水処理場、その隣に赤い煉瓦造りの尼崎紡績本社（明治三三年建設　大日本紡績発祥地　現ユニチカ記念館）があります。ＮＨＫ連続ドラマ「あさが来た」のヒロイン広岡朝子の主人広岡信五郎が初代社長を務めています。現在保存すべきか解体かで日本建築学会、会社側、市の間で協議中です。

さらに進み、大物川跡（昭和四五年埋立完了）は今は歴史の散歩みち（着船橋跡石碑）の公園（大物川緑地）となっています。明治大正時代までは大物川沿い周辺には醤油蔵、酒蔵が数十件あったそうです。公園を西に進み、また東本町線を跨ぎ、すぐに大きな大物橋跡石碑の所で小休止、大物（浦）辺りの案内図と摂津名所図会（平安時代より港町・河尻として栄える様子の絵）と説明書がありました。**さらに西奥の**北浜公園に行くと尼崎城絵図詳細図（東外堀と東三の丸の境辺り）があり、また傍らの四三号線側壁下に東大手橋跡の石碑があり、尼崎城内の何処にいるのかがわかります。

公園を出て北へ、大物郵便局横を通ると正面に墓地が見えます、深正院（尼崎藩主松平家の菩提寺）の裏です。通り過ぎ大物主神社へ、境内には義経弁慶隠家跡の石碑あります。尼崎市では因んで毎年夏に大物緑地公園の能舞台で船弁慶の薪能が催されています。

境内を出て、深正院正面前を通り、歩き進むと阪神電車の高架と西側に阪神電車操車場の東側擁壁（高さ一〇ｍ余）前に出ます。この操車場下には、寛永十二年亥八月二日摂州尼ケ崎城詳図に古城表記があり、中世尼崎城か、それとも大物城か・・・発掘できませんので確認が出来ていません。阪神電車の高架下を越えてすぐに、交番の横に大物くづれ戦跡の石碑（享禄四年　細川晴元×細川高国）、阪神大物駅より西へ二〇〇ｍの所にあります。交番前の道は尼崎港線が走っていた所です。昔の線路上には同じ形の住宅がずらりと並んで建てられ、線路の痕跡は僅かに残っていました。

帰路、尼崎市立歴史博物館（令和二年一〇月開館　本丸・天守部分）前に戻り、向いの旧尼崎警察署（大正一五年建設　近世ルネッサンス式　二の丸）西横、琴ノ浦・城内高校東南隅にある青山幸利遺徳顕彰碑（貞享元年一六八四年没　篆額　耿光不滅コウコウフメツ　昭和一

六年建立）があります。

この顕彰碑は幸利の石棺の蓋（神戸大倉山から麓、安養寺に大正元年改葬時　蓋側面に　本石ハ　候石棺ノ　蓋石ナリ　神戸安養寺寄進）で造られています。碑には当時の発願者・建立団体・地元政治家・軍人・石工名等が刻まれております。傍らには海老江村検地（延宝五年一六七七年）の総奉行山口治部右衛門安隆（家老　家禄六〇〇石元禄八年一六九五年没）が奉納した灯籠が建っています。雑草は背高く忘れられた一隅になっています。最後に昨年開館した尼崎市立歴史博物館の江戸時代コーナーを見学して無事終了、阪神尼崎駅で午後四時頃解散しました。

追記、尼崎城は明治六年に廃城が決まり、明治から大正・昭和初期までに、建物、石垣、堀と消えて行き、永く人々からは尼崎城の存在はすっかり忘れられていましが、昭和六一年に伊丹城や明石城等近世城郭の発掘調査が一定の成果があったので、試しにと、昭和六二年に尼崎市が東の一角を発掘調査すると、地下に遺構を発見、以後現在までに六七次に及ぶ発掘調査が行われました。現在城址全体は埋蔵文化財包蔵地になっています。

参考資料

「水曜歴史講座テキスト」尼崎市教育委員会　歴博文化財担当
ほか

堺幕府と野田城　―文献にみる野田・福島・中嶋―

二〇二一年第一回セミナー報告―

森畑通夫

日　時　二〇二一年四月一八日(日)　午後二時～四時
会　場　福島区民センター　三〇一・三〇二号室
講　師　菅原善隆氏（法華宗顕本寺(堺市)住職）
参加者　一九名

今回のセミナーは、一旦は落ち着きつつあった大阪でのコロナ感染者数が再び増加の兆しを示す中での一年越しのリベンジ開催となりました。このため、参加者を限定して、窓を開けたままにするなどの感染対策を講じた上で、極めて少人数の集まりとなりました。

しかし、講師の菅原住職から、様々な文献や古地図に基づいて、福島区及びその周辺での三好一族の足跡について大変分かりやすいお話をいただいたことから、参加者一同、約二時間にわたり大変有意義な時を過ごすことが出来ました。

以下に、その概要を報告します。

幻の政権「堺幕府」

室町後期の大永七年（一五二七）～天文元年（一五三二）年の五年間

にわたり、堺を拠点として室町幕府に対抗する政治権力が存在した。それが歴史の授業では習わない「幻の堺幕府」である。この「堺幕府」を巡る抗争の最中に、その昔福島区に築かれたという「野田城」が文献上に初めて姿を現す。

近年「堺幕府」の存在が語られるようになったのは、五〇年ほど前に歴史学者 今谷明氏が「大永八年一〇月一四日」付けの幕府奉公人奉書という古文書を発見したことに始まる。歴史の上では、その年の八月二〇日に「大永」の年号は「享禄」に改元されており、同氏が発見した古文書に大永八年一〇月という本来は有り得ない年月が記されていたことから、当時の改元に公然と反対する勢力の存在が突き止められていった。

現在は、「堺幕府」の存在を裏付ける関連文書として、将軍職が発給する御内書三通、奉公人奉書五一通が確認されている。更に他の文献においても、『祇園執行日記』には「天下将軍、御二人に候」、『二水記』には「堺武家」、『言継卿記』には「堺の室町殿」との記述例があり、当時の堺に将軍に匹敵する強力な政治勢力が存在したことを示唆している。

「堺幕府」成立の背景には、足利将軍家跡目を巡る足利義晴と足利義維の兄弟対立と、細川京兆家(管領職)跡目を巡る細川高国(細川野州家)と細川晴元(阿波細川家)の対立があった。こうした中で「堺幕府」は、若い足利義維、細川晴元を年長の三好元長(阿波細川家家臣、三好長慶の父)が支える形で成立した。

そして、享禄四年(一五三一)、この両陣営の対立抗争、所謂「天王寺くつれ」(大物崩れ)の戦いの中で「野田」の地名が登場する。『細川両家記』は、「常植(細川高国)は中嶋の内うらい(浦江)に陣取給う。浦上(村宗)は同野田福嶋に陣取なり」と記している。

この戦いで三好元長は、堺幕府方の軍勢を率いて、浦上村宗(備前守護代)を討ち取り、細川高国を大物(広徳寺)で切腹させる功績を挙げるが、その後間もなく、主君である細川晴元と対立し、享禄五年(一五三二)、晴元方に味方する本願寺一向一揆の大軍に堺を攻められ、元長は、現在菅原氏が住職を務める顕本寺において自刃し、義維は阿波に追放されて、「堺幕府」は滅亡する。

文献にみる野田・福島・中嶋

「中嶋」について

細川両家記には、「中嶋の内、野田福嶋と申すところ」「中嶋の江口」と、野田福島(福島区)も江口(東淀川区)も何れも「中嶋」にあると記されており、神崎川と旧淀川に囲まれたかなり広い範囲一帯が当時「中嶋」と呼ばれていたことを示している。

また、「中嶋」という地域の広がりを視覚的に理解する上では、地形の不正確な「浪華往古図」や「石山合戦配陣図」よりも、むしろ一六〇五年当時の淀川以西を描いている「慶長十年摂津国絵図」の方が適切であり、それを見ると「中嶋」が地理的に戦略上の要衝であり、その時代の戦場となることも多かったことがより明確に理解できる。

「野田」はひとつではなかった

『細川両家記』は「野田」について「先つ西は大海なり。淡路四国へ舟通路自由なり。北南東方は淀川まきたり。里のまはりは沼田なり。是程なる所は稀なるべし」と軍事拠点としての「野田」の優位性を記し、『私心記』は「福島」について「福島へ唐船(遣明船)見物に行」「富田息女(本願寺・教行寺実誓の娘)、阿波篠原(三好家家臣)の所へヨメ入也(中略)福嶋まで御送候」と、「福島」には四国・淡路と大阪を結ぶ船着き場があったことを記している。

しかし一方で、文献に出てくる「野田」の中には、位置関係から福島区の「野田」とはとても思えない記述もある。例えば、『私心記』には「朝より天王寺所々焼き候て榎並へ入候」、天文日記には「榎並野田の橋事」という記述がある。城東区野江にある「榎並」と福島区の「野田」は距離が余りにも離れすぎており、どうも辻褄が合わない。そこで調べてみたら、今の京橋のところにも「野田」があることが分かった。歴史に登場する大阪の「野田」はひとつではなかった。

三好長慶の中嶋での陣所は？

細川晴元方に属していた三好長慶が、敵対する細川氏綱(細川高国養子)・遊佐長教(河内守護代)連合軍を撃破した**天文一六年(一五四七)の舎利寺の戦い**の丁度一年前の九月、三好長慶が堺から中嶋に入ったことが『細川両家記』と『私心記』の双方に記されている。また、細川晴元と袂を分かち細川氏綱方に転じた三好長慶が、宿敵三好政長(細川晴元方、三好家分家)を討った**天文一八年(一五四九)の江口の戦い**では、三好長慶が尼崎から中嶋に入ったことが『私心記』に記されている。残念ながら陣所の特定は困難であるが、このような文献の記述から見て、三好長慶が中嶋の地の何れかに在陣したことは確かである。

野田・福島は同一拠点か別拠点か？

『信長公記』は「野田・福島の城を補強し」、『細川両家記』は「福嶋へ入城」と記しており、規模は不明ながら両所ともに城の存在が確認できる。

『言継卿記』は「敵野田、福島両所に籠云々」、『細川両家記』は「野田福嶋に猶もって堀をほり(中略)この両所へ楯籠らる也」と、両所を一体的な拠点として記す一方で、『己行記』は「秋阿波衆出張し福嶋に陣す」、『細川両家記』は「野田より出る」「福嶋へ入城」と別々に捉えた表現もみられる。

以上のことから、野田と福島は「地域としては一体的」「物理的には二か所」であったと考えられる。

以上が、菅原住職による講演の概要ですが、当日は一部空欄を設けた資料を全員に配布して、クイズ形式で参加者に質問を投げかけながら話を進められたので、参加者も野田・福島・中嶋の地に色々な思いを巡らせつつ熱心に話を伺うことができました。

“「野田」はひとつではなかった”との菅原住職の指摘は示唆に富んでいます。京橋の近くの「野田」以外にも、大阪府下には、高槻の鵜殿と呼ばれる淀川沿いの葦原の近くに「野田」の地名があります。

また、豊中には阪急庄内駅の北側に「野田町」があります。更に、南海高野線では堺に「北野田駅」があり、駅南の旧野田村には「野田城」があったと言われています。調べれば他にも「野田」が見つかるかも知れません。色々な文献に登場する「野田」を、福島区の「野田」のことだと鵜呑みにするのは早計であると肝に銘じる必要を感じました。

また、「中嶋での三好長慶の陣所はどこにあったのか？」は今もって謎ですが、それを伝える伝承が「中嶋」の各地に残っていることは確かです。神崎川沿いでは、淀川区加島の富光寺（ふっこう）、香具波志（かぐはし）神社や三津屋の三津屋城跡（光専寺）に、旧中津川沿いでは、北区大淀の浦江城跡（勝楽寺とその周辺）、淀川区十三の堀城跡（武田薬品大阪工場辺り）、東淀川区柴島の柴島（くにしま）城跡（柴島中学とその周辺）にそれぞれ三好長慶の足跡が伝えられています。畿内に城を構え、畿内での戦さを勝ち抜いて、信長に先立つ天下人へと昇り詰めた戦国武将・三好長慶にとって、「中嶋」の地は極めて重要な戦略拠点であったことが偲ばれます。

セミナー開催の一週間後の四月二五日、コロナ感染拡大により大阪に三度目の緊急事態宣言が発令されました。コロナ禍で活動が制約を受ける中で開催された本セミナーは、二〇二一年唯一の極めて貴重な催しとなりました。

引用文献説明

『天文日記』本願寺第十世 証如の日記
『私心記』本願寺第八世 蓮如の一三男 実従の日記
『細川両家記』三好方家臣 生嶋宗竹著述の軍記
『言継卿記』公家・山科言継の日記
『祇園執行日記』祇園社（京都八坂神社）の社務記録
『二水記』公家・鷲尾隆康の日記
『己行記』法華宗妙國寺（堺市）開祖 日珖（にちこう）の行状記録
『信長公記』織田信長家臣・太田牛一著述の伝記

古い写真を探しています

お手元のアルバムに
災害や今はない建物などが
写っているものがあればご提供ください
展示などに活用させていただきます。

２０２１年の事業

『福島区歴史研究会会報　第１４号』発行　３月
展示「区の花　のだふじの今昔」3.24～8.19　会場･福島図書館
展示「写真で見る福島区」2020.10.7～2021.4.8　会場･福島区役所
展示「福島区の史跡」4.9～11.4　会場・福島区役所
セミナー「堺幕府と野田城」4.18　講師・菅原善隆氏　会場・福島区民センター
展示「区の花　のだふじの今昔」11.5～　会場･福島区役所

２０２１年の活動記録

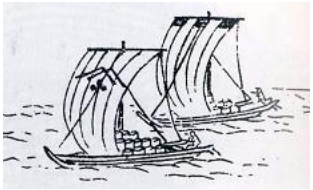
2.18　役員会・企画会議
3.18　総会・企画会議
4.9　展示替え作業(区役所)
4.15　企画会議
4.20　鷺洲小学校　橋柱見学
7.15　企画会議
8.19　展示撤去作業(図書館)
9.16　企画会議
10.21 企画会議
10.21 尼崎東地区散策
11.5　展示替え作業(区役所)
11.18 企画会議
12.16 企画会議

野田新橋筋商店街にて　二〇二一

田辺聖子記念部会拡大会議　3.10　8.19　9.14　10.12
　　ﾘｰﾌﾚｯﾄ手分け作業　4.17　　準備会　6.10　10.4
野田村町歩きガイドブック作成会議　12.2

浦江塾〔協力〕7.3　10.2　11.6　12.4

ホームページ　http://o-fukushima.com/rekishi/top.htm
（会報バックナンバーも掲載）



（印刷：谷口印刷紙業）